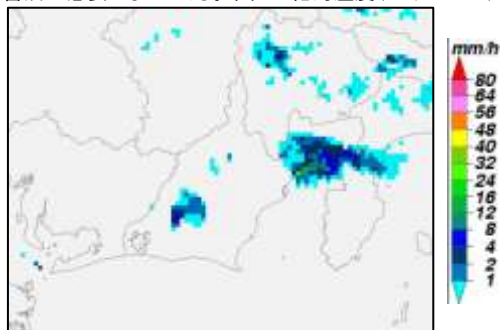
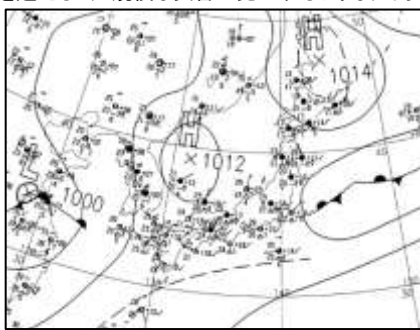


1. 気象経過

30日には、上空に寒気を伴った気圧の谷があって、日本付近を東進していた。一方地上では能登半島付近に低気圧があってゆっくり東進し、夜には東北地方南部に上陸して消滅した。停滞前線は日本付近で弱まっていたが、暖湿流は残っており、30日21時には浜松(防衛省)高度1500m付近で相当温位*341Kの湿った風が吹いていた。このため、関東甲信地方では日中から雷を伴った積乱雲が発生しており、次第に南下していた。夕方には東部に雨雲がかかり始め、富士市付近にあった雨雲が局地的に発達し、**アメダス吉原(現アメダス富士)では、30日21時までの1時間に観測史上2位となる(当時)80mmの猛烈な雨となった。**

*相当温位: ある高さの空気塊のエネルギーを同じ条件下(1000hPa気圧面)で比較するため換算したもの。暖候期の高度1500m付近の相当温位の目安としては、330Kを越えると短時間強雨の可能性が高まり、340Kを越えると大規模な災害が発生するような大雨に警戒が必要となってくる。単位は絶対温度(K:ケルビン)



2008年7月30日21時地上天気図

2008年7月30日20時40分気象レーダー

2. 大雨の原因、特徴

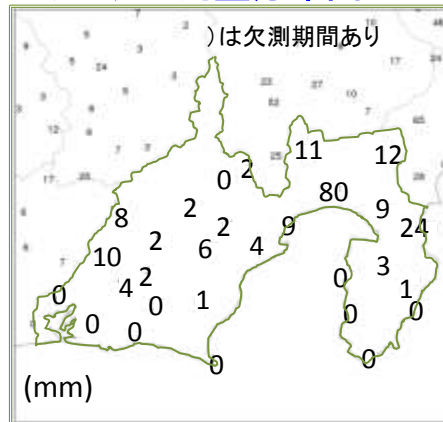
関東甲信地方にあった雨雲が東部まで南下し、激しい雨をもたらすことは珍しくない。今回のように猛烈な雨となった要因としては、上空の寒気の影響があったと考えられる。富士川沿いでは上空の寒気の影響でさらに雨雲が発達する事例があり、警戒が必要である(類似例2008年7月4日)。

3. 被害概要

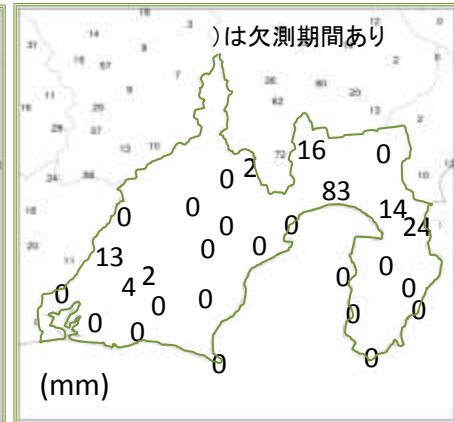
	床上浸水(棟)	床下浸水(棟)	全壊(棟)	半壊(棟)	一部損壊(棟)	通行方不明者(人)	重傷者(人)	軽傷者(人)	崖崩れ(カ所)	土砂崩れ(カ所)	河川(カ所)	幹線道路(カ所)	鉄道不通(カ所)
全県	6	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中部	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
西部	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
東部	6	19	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-
伊豆	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-

被害数は、静岡県 平成10年における災害の状況による

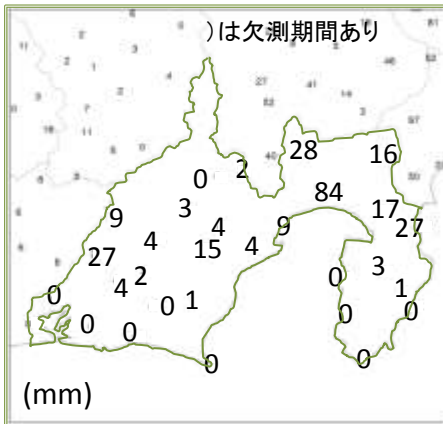
4. アメダス雨量分布図



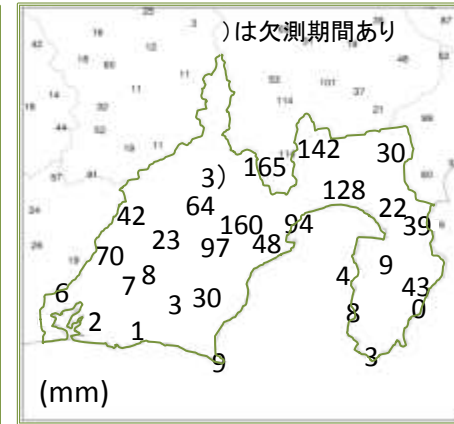
アメダス1時間雨量(正時毎)7月30日の最大値



アメダス3時間雨量(正時毎)7月30日 20時~22時

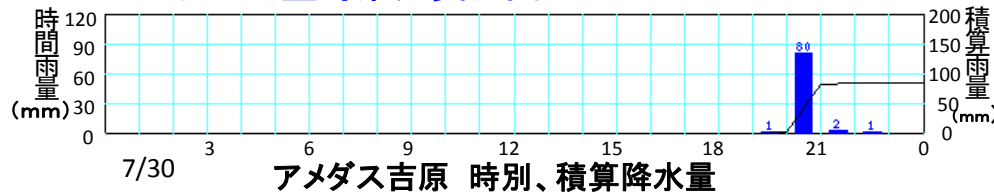


アメダス日雨量7月30日



アメダス3日間雨量7月28日~30日

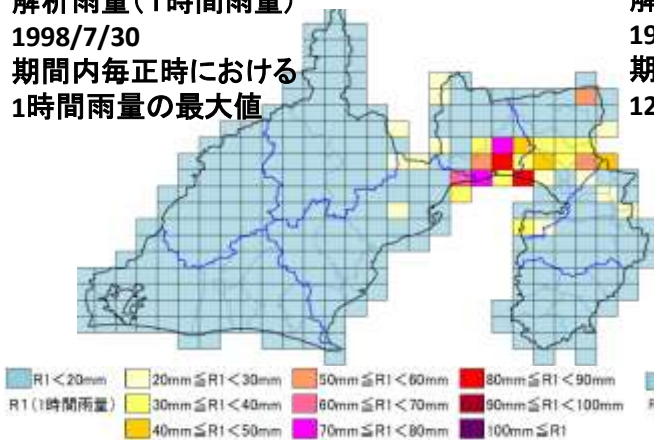
5. アメダス雨量時系列変化図



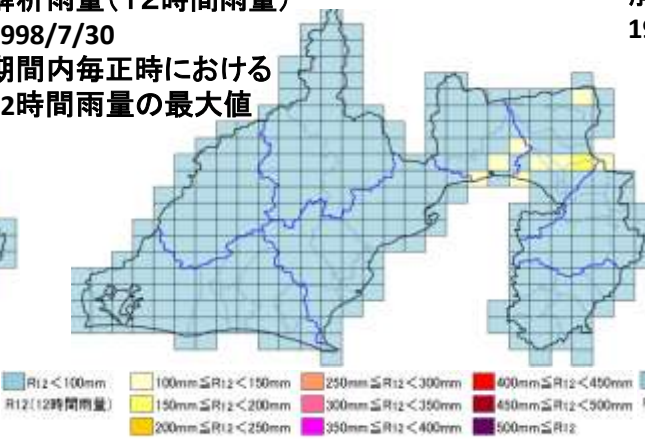
アメダス吉原 時別、積算降水量

6. 解析雨量分布図

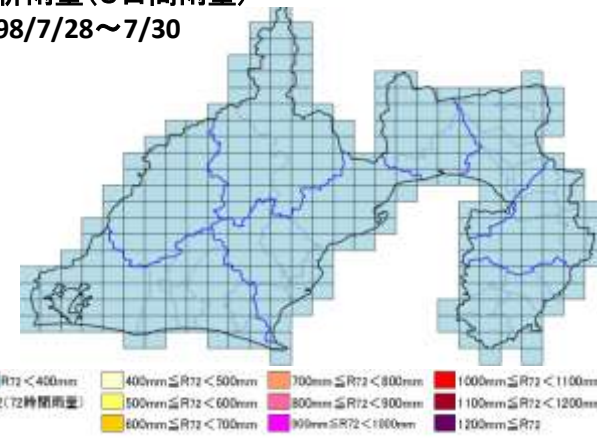
解析雨量(1時間雨量)
1998/7/30
期間内毎正時における
1時間雨量の最大値



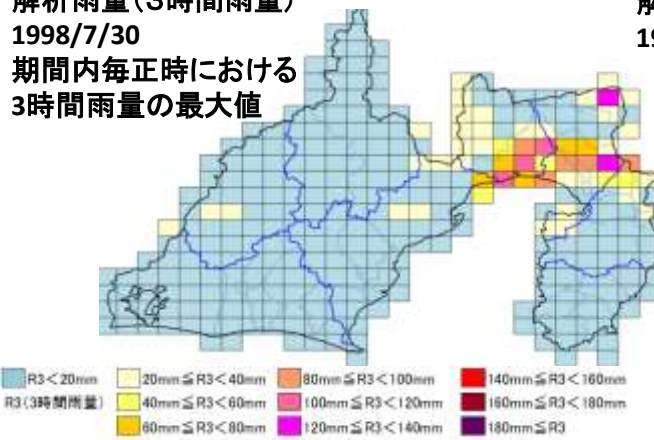
解析雨量(12時間雨量)
1998/7/30
期間内毎正時における
12時間雨量の最大値



解析雨量(3日間雨量)
1998/7/28~7/30



解析雨量(3時間雨量)
1998/7/30
期間内毎正時における
3時間雨量の最大値



解析雨量(日雨量)
1998/7/30



7. 床上、床下浸水被害分布図 (市町毎)

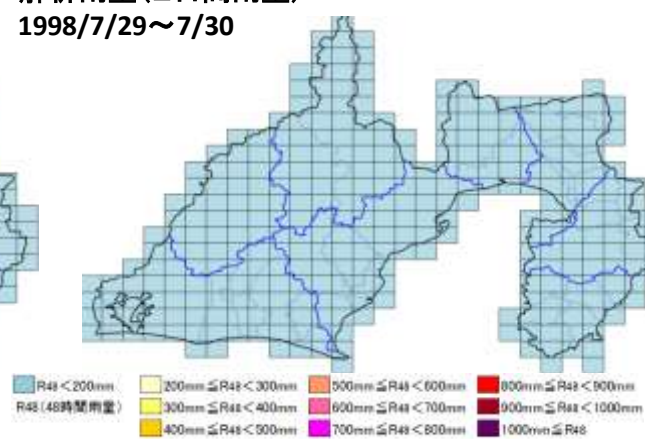


被害数は、静岡県 平成10年における災害の状況による

解析雨量(6時間雨量)
1998/7/30
期間内毎正時における
6時間雨量の最大値



解析雨量(2日間雨量)
1998/7/29~7/30



解析雨量と浸水害分布図からわかる大雨の特徴

局地的な大雨であったことが、各雨量分布図から分かるが、降った富士市付近では猛烈な雨となり、その差が際立っている。過去の事例でも同様の特徴がある。積乱雲の発達に対して、寒気先端がかかり始めた時が一番大きく影響するが、寒気トラフは順調に東進していき、雨は短時間で終息することが多いのも特徴である。